

平成 28 年 6 月 13 日現在

機関番号：32682
 研究種目：基盤研究(C) (一般)
 研究期間：2013～2015
 課題番号：25370569
 研究課題名(和文) 英語史に見る主要部と依存部の競合関係について - 通言語的特異性の過去、現在、未来 -

研究課題名(英文) Competing motivations in head-dependent relations in the history of English: A pan-chronic view of typological heterogeneity

研究代表者
 柴崎 礼士郎(Reijirou, Shibasaki)
 明治大学・公私立大学の部局等・准教授

研究者番号：50412854
 交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題では主に以下の2点に取り組んだ。一つは形態統語面から見た主要部と依存部の変化である。例えば、18世紀後半頃まではit is > 'tis が散見していたが、19世紀以降はit is > it'sへと依存関係が変化した。この変化には「大母音推移」と呼ばれる音韻変化が起因している。もう一つは、談話情報面から見た主要部と依存部の変化である。例えばThe fact is that I don't like itでは、the fact isが統語上主要部であるが、談話情報上はI don't like it が中心である。この変化には「従属節の主節化」という通言語的な特徴が現れている。

研究成果の概要(英文)： This research project addresses the following two issues. One concerns head-dependent relations and change in morphosyntax. The contracted form 'tis (< it is) is often found until the end of the eighteenth century, while it's (< it is) becomes predominant in usage and frequency from the nineteenth century onward. This radical morphosyntactic change is brought about by the Great Vowel Shift, i.e. the long term change of the sound system roughly in 1500 through 1700. The other centers on head-dependent relations and change with respect to the flow of information in discourse. In the sentence The fact is that I don't like it, the first part the fact is can be regarded as head and the second part I don't like it as dependent from a syntactic point of view; however, viewed from the perspective of information flow and status, the second part becomes primary. This change, i.e. from subordinate clause to main clause, is witnessed in a variety of languages, known as insubordination.

研究分野：英語学

キーワード：歴史言語学 談話分析 言語類型論 文法化 英語史 歴史語用論

1. 研究開始当初の背景

本研究は、平成 22 年度から平成 24 年度まで採択された科学研究費若手研究(B)「主要部標示型から依存部標示型へー歴史言語類型論から見た英語人称代名詞の特異性ー」(研究課題番号: 22720194 研究代表者: 柴崎礼士郎)の延長線上に位置する。本研究課題は国際共同研究として、連携研究者東泉裕子氏(東京学芸大学留学生センター)および研究協力者 Jerzy Nykiel 氏(申請当時ポーランド・シレジア大学、現在ノルウェー・ベルゲン大学)と実施した。

研究代表者(柴崎)が前科研費の研究を進める中で、関連研究に取り組む東泉氏、および、Nykiel 氏との交流と親交が深まった。研究開始以前より、Nykiel 氏は古英語から初期近代英語にかけての従属節の構文変化を、東泉氏は初期近代英語から現代英語にかけての従属節の主節化を、そして、柴崎は初期/後期近代英語から現代英語にかけての主節の談話標識化という一見異なる言語変化に取り組んでいた。一言語内の特定の表現を集中的に分析研究することも大切ではある。しかし、近い談話機能を有する関連構文を比較分析することにより、時代を超えたところに潜在する人間に共通の認知的・相互行為的営みとその言語的顕在化をより良く理解できるという点において3名は見解が一致し、国際共同研究へと繋がった。

2. 研究の目的

研究開始当初の目的は以下の通りであった。言語類型論上の分類の一つとして、「主要部標示」(head-marking)と「依存部標示」(dependent-marking)がある。その類型の中で、代名詞主語は音韻形態的に縮約して述部要素へ標示される前者のタイプが一般的であり、英語史においても確認可能であった(e.g. *it was > 'twas, it is > 'tis*)。しかし、現代英語では形態依存関係が逆転しており(e.g. *it is > it's*)、その原因を言語内的且つ言語外的に解明することが目的であった。

一方、各年度の実施状況報告書でも述べた通り研究の進捗は予想以上に良く、本課題は形態統語面に重点を置く研究から、談話構造あるいは情報連鎖というより視野の広い角度から「主要部と依存部」全体を俯瞰する方向へと拡張した。例えば *The fact is that I don't want to go there* では、*the fact is* が統語上主要部であるが、談話情報上は *I don't want to go there* が中心である。つまり、主要部と依存部という課題設定は、複数の分析手続きを取り入れることを可能とする柔軟性と汎用性を伴い、且つ、言語研究の最前線とも符合する

時宜を得たものであることを裏付けている。ドイツ語研究者(ブレーメン大学大塚瞳氏)との英独対照研究も実現し、結果的に、より包括的に言語現象を捉えることができた。

3. 研究の方法

研究目的達成のために、古英語末期から現代英語までの広い範囲を調査対象時期とした。基礎調査には市販コーパスを用いて言語変化の大まかな流れを確認し、その後、必要な場合には以下のデータベースを用いて補完調査も実施した。(1)本学明治大学図書館所蔵の17世紀から19世紀までの電子資料の利用、(2)主要文学作品が無料で入手可能な電子テキスト・アーカイブ Project Gutenberg (<https://www.gutenberg.org/>)および Oxford Text Archive (<http://ota.ahds.ac.uk/>)の利用、(3)無料検索ツール AntConc (<http://www.laurenceanthony.net/software.html>)ソフトウェアを用いた点である。

一方、下記の2点には留意した。一つは原典・原文の確認である。歴史資料を電子化する際に、取り分け18世紀以前のものには句読点等へ編集者の解釈が施されている場合が多く、校訂本毎に異なる資料も多い。更に、コーパスには入力ミスが付きものであり、原文へのアクセスが制限されている無償公開コーパスも存在する。そこで、具体的コンテキストを含めた分析にはテキスト精読を実施した。

もう一つは、他言語コーパスとの比較を通して、英語コーパスの利点と欠点の理解を心掛けたことである。例えば、標準コーパスとして世界的に広く利用されている British National Corpus (BNC)は、著作権処理のしやすいものをデータ化したためサンプリング方法およびジャンルに大きな問題がある。また、Mark Davies 教授(米ブリガム・ヤング大学)の運営するコーパス群では、検索結果の出力文字列から談話コンテキストを精査するには十分な長さを提示できていない。こうした知見は、複数の言語研究に携わり、且つ、コーパス事情に通じていなければ得られない重要な点であり、逆に、今後の研究に対する有益なヒントでもある。

このように、デジタル資料だけではなくアナログ資料を用いることにより、可能な限り客観的に研究を進めることにも細心の注意を払った。

4. 研究成果

「研究の目的」で説明した通り、本研究課

題は「形態統語」面から見た主要部と依存部の関係だけでなく、「談話情報」面から見た主要部と依存部の関係へと拡張した。

前者の研究成果は以下の通りである。英語における形態統語標示が通言語的に異質な形態依存関係を持つに至った原因として、「大母音推移」(GVS)に注目した。大母音推移とは後期中英語期から初期近代英語期にかけて起こった変化であり、[I]Jespersen (1909)によって指摘された。つまり、強勢のある長母音の調音点すなわち舌の高さが一段か二段高くなる現象である。舌の位置が最も高い[i:]と[u:]の場合は、それぞれ二重母音化を引き起こした([i:]>[iɪ]>[əɪ]>[aɪ], [u:]>[uɪ]>[əʊ]>[aʊ])。これにより、一人称単数代名詞 *I* は二重母音化を被り、他の強勢を持つ語彙に依存することなく生起できるようになった。*I* は主要部となり、その証拠として *I'm, I've, I'll, etc.* などの表現を生み出すこととなった。使用頻度の高い *I'm* 表現は、他の成員である *you are* や *it is* へも連鎖的に影響を与えて *you're* や *it's* を創出させ、結果的に、英語は言語的に異質な「代名詞主語の主要部化」をパラダイム全体で完成させるに至る。

一方後者の研究成果は以下の通りである。*The fact is (that), the point is (that), the problem is (that)* 等の表現は、先行情報と関連・対立する内容を導入することに特化した構文である。こうした構文事例は[2]Schmid (2000)の提唱する「貝殻名詞構文」(shell noun constructions)あるいは[3]Hopper & Thompson (2008)が「投射構文」(projector constructions)と呼び習わす構文の一部である。先行研究では、特に現代語における詳細な分析が報告されている一方、歴史的発達経緯を報告するものは皆無に等しかった。そこで、上掲構文の通時的発達をコーパスと文献資料を用いて綿密に調査し、構文理論と文法化理論の点から分析した。会話データからは上掲構文が音調上独立して使用される傾向が明らかとなり、コーパス分析からは修飾語や補文化辞の有無によるヴァリエーションも確認でき、更に、使用頻度に応じた構文的拡張を遂げていることを例証した。

<引用文献>

[1]Jespersen, O. 1909. *A Modern English Grammar on Historical Principles, vol. I Sounds and Spellings*. London: Allen & Unwin. [2]Schmid, H.-J. (2000) *English Abstract Nouns as Conceptual Shells*. Mouton de Gruyter. [3]Hopper, P. J. & Thompson, S. A. (2008) "Projectability and clause combining in interaction." In Laury, R. (ed.), *Cross-Linguistic Studies of Clause Combining*, pp. 99–123. John Benjamins.

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 10 件)

- ① HIGASHIZUMI, Y. "The development of confirmation/agreement markers away from the RP in Japanese," *Journal of Historical Pragmatics* (Special Issue) 17.2, John Benjamins, to appear (2016).
- ② 柴崎礼土郎. 「現代アメリカ英語の二重コピュラ構文—再分析、構文拡張、談話構造の観点から—」, 秋元実治・青木博史・前田満 (編) 『日英語の文法化と構文化』, pp. 147–180, ひつじ書房, 2015 (Nov.).
- ③ 柴崎礼土郎. 「「...事実也。」から「。事実...」へ—談話機能の発達に伴う統語位置の変化—」, 『第8回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』, pp. 163–170, 国立国語研究所, 2015 (Sept.).
- ④ 柴崎礼土郎. 「挿入節の分布から見る談話の周辺と情報連鎖について—the question is (that) と that's the question を事例として」, 『第15回日本認知言語学会予稿集』, pp. 350–362, 日本認知言語学会, 2015 (July).
- ⑤ 柴崎礼土郎. 「直近のアメリカ英語史における *the problem is (that)* の分析—構文の談話基盤性を中心に—」, 『語用論研究』第16号, pp. 1–19, 日本語用論学会, 2015 (March).
- ⑥ 柴崎礼土郎. 「共有構文 (*ἀπὸ κοινοῦ*) の創発と談話構造—現代アメリカ英語を中心に—」, 『ことばと人間』第10号, 懇道論文, pp. 17–37, 「言語と人間」研究会, 2015 (March).
- ⑦ SHIBASAKI, R. "On the grammaticalization of *the thing is* and related issues in the history of American English," Michael Adams, Robert D. Fulk & Laurel J. Brinton (eds.), *Studies in the History of the English Language VI: Evidence and Method in Histories of English*, pp. 99–122, De Gruyter Mouton, 2014 (Nov).
- ⑧ SHIBASAKI, R. "More thoughts on the grammaticalization of personal pronouns," Sylvie Hancil & Ekkehard König (eds.), *Grammaticalization Theory and Data*, pp. 129–156, John Benjamins, 2014 (Sept).
- ⑨ SHIBASAKI, R. "Functions of *the thing is* in spoken American English: With its origin and development," Ken Nakagawa (ed.), *The Thirtieth Anniversary Publication of the Modern English Association*, pp. 303–318, Eihōsha, 2014 (June).
- ⑩ SHIBASAKI, R. "On the development of *the point is* and related issues in the history of American English," *English Linguistics*,

volume 31 (1), pp. 79–113, *The English Linguistic Society of Japan*, 2014 (June). (EL 論文賞受賞, 日本英語学会賞 (論文) 受賞)

[学会発表] (計 21 件) *招待発表等も含む

- ①柴崎礼士郎.「構文変化と構文化について—日本語と他言語からの事例研究—」,「第3回京都語用論コロキウム: 動的語用論の構築へ向けて」, 京都工芸繊維大学, 2016年3月13日, 招待発表.
- ②SHIBASAKI, R. “Constructional variations and change in the development of *chances are* in American English,” *The 1st Purdue Languages and Cultures Conference (PLCC-1)*, Purdue University, U.S.A., 4-6 March 2016.
- ③柴崎礼士郎.「発話周辺と共有構文の創発」,「シンポジウム: 構文変化と談話・情報構造—データと理論の融合を目指して—」,「日本英語学会第33回大会」, 於: 関西外国語大学中宮キャンパス, 2015年11月21-22日.
- ④HIGASHIIZUMI, Y. “Insubordinate constructions and the left and right peripheries in Modern Japanese: A corpus-based study of grammaticalization of adverbial clauses,” *International Workshop: Grammaticalization meets Construction Grammar*, University of Gothenburg, Sweden, 8-9 October 2015.
- ⑤柴崎礼士郎.「「...事実也。」から「。事実...」へ—談話機能の発達に伴う統語位置の変化—」,「第8回コーパス日本語学ワークショップ」, 於: 国立国語研究所, 2015年9月1-2日.
- ⑥柴崎礼士郎.「*So was, I'm, I'm just getting a little confused here*: 自己反復は定型表現なのだろうか?」,「第11回話しことばの言語学ワークショップ」, 於: 慶應義塾大学日吉キャンパス, 2015年8月22日, 発表兼指名討論者.
- ⑦SHIBASAKI, R. “Interactional routines at the edge of utterance: Explorations into *the question is (that)* and *that's the question* in American English,” *The 14th International Pragmatics Conference (IPrA-14)*, Antwerp, Belgium, 26-31 July 2015.
- ⑧柴崎礼士郎.「文副詞的機能を担う名詞の史的発達と文法化の方向性について—「事実」と「問題」を中心に—」,「国際シンポジウム: 文法化: 日本語研究と類型論的研究」, 於: 国立国語研究所, 2015年7月3-5日.
- ⑨SHIBASAKI, R. “The discourse-based development of shell nouns constructions in English: The case of the problem is (that) and that's the problem,” *WORKSHOP: Clauses on the Move: A Historical-Contrastive Approach to English and German, The 32nd Conference of the English Linguistic Society of Japan*, Gakushuin University, Tokyo, 8-9 Nov. 2014.
- ⑩HIGASHIIZUMI, Y. (2014a) “The Diachrony of insubordinate *because*-clauses and their discourse functions,” *WORKSHOP: Clauses on the Move: A Historical-Contrastive Approach to English and German, The 32nd Conference of the English Linguistic Society of Japan*, Gakushuin University, Tokyo, 8-9 Nov. 2014.
- ⑪柴崎礼士郎.「アメリカ英語における発話者基盤の言語的刷新について」,「言語と人間」研究会」10月例会, 於: 立教大学, 2014年10月25日, 招待発表.
- ⑫柴崎礼士郎.「アメリカ英語における (*the chances are (that)*) について—談話機能、伝播、文法化—」,「英語コーパス学会第40回大会」, 於: 熊本学園大学, 2014年10月4-5日.
- ⑬柴崎礼士郎.「挿入節の分布から見る談話の周辺と情報連鎖について—the *question is (that)*と *that's the question* を事例として」,「日本認知言語学会第15回全国大会」, 於: 慶應義塾大学日吉キャンパス, 2014年9月20-21日.
- ⑭SHIBASAKI, R. “A diachronic approach to shell noun constructions: With a focus on *the fact is (that)*,” *The 3rd Conference of the International Society for the Linguistics of English (ISLE3)*, University of Zurich, Switzerland, 24-27 Aug. 2014.
- ⑮SHIBASAKI, R. “Diachronic aspects of the shell noun constructions: With a focus on *the bottom line is (that)*,” *The 18th International Conference on English Historical Linguistics (ICEHL18)*, University of Leuven (KU Leuven), Belgium, 14-18 July 2014.
- ⑯HIGASHIIZUMI, Y. “Development of discourse-pragmatic markers in Modern Japanese: A corpus-based study of *dar(o)* and *desho(o)*,” *Discourse-Pragmatic Variation & Change 2*, Newcastle University, UK, 7-9 April 2014.
- ⑰SHIBASAKI, R. “From parenthetical to main clause: Rethinking the directions of change with a focus on the problem is in the history of English,” *WORKSHOP: More thoughts on 'clause' from a historical-pragmatic perspective, The 16th Annual Conference of Pragmatics Society of Japan (PSJ-16)*, Keio University at Mita, 7-8 Dec. 2013.
- ⑱HIGASHIIZUMI, Y. “More thoughts on stand-alone *because*-clauses from a

historical-pragmatic perspective,”
WORKSHOP: More thoughts on 'clause' from a historical-pragmatic perspective, The 16th Annual Conference of Pragmatics Society of Japan (PSJ-16), Keio University at Mita, 7-8 Dec. 2013.

- ⑱ SHIBASAKI, R. “Negator vs. copula contractions in the history of American English,” *The 5th International Conference on Late Modern English (LModE-5)*, Università degli studi di Bergamo, Bergamo, Italy, 28-30 Aug. 2013.
- ⑳ SHIBASAKI, R. “From parenthetical to main clause: The case of the problem is in the history of American English,” *The 21st International Conference on Historical Linguistics (ICHL21)*, University of Oslo, Oslo, Norway, 5-9 Aug. 2013.
- ㉑ 柴崎礼士郎. 「「名詞+is 構文」の談話標識化に関する予備的研究— (the) point is, ... を事例として—」, 「沖縄外国文学会第28回大会」, 於: 沖縄大学, 2013年7月6日.

[図書] (計5件)

- ① Higashiizumi, Y., Onodera, N. O. & S.-O. Sohn. (eds.), John Benjamins, *Journal of Historical Pragmatics* 17(2) Special Issue: Periphery, to appear (2016), 雑誌論文①を掲載.
- ② 秋元実治・青木博史・前田満 (編), ひつじ書房, 『日英語の文法化と構文化』, 2014 (Nov.), 345p (総頁), pp. 147–180 (担当頁). 雑誌論文②を掲載.
- ③ Michael Adams, Robert D. Fulk & Laurel J. Brinton (eds.), De Gruyter Mouton, *Studies in the History of the English Language VI: Evidence and Method in Histories of English*, 2014 (Nov.), 337p (総頁), pp. 99–122 (担当頁). 雑誌論文⑦を掲載.
- ④ Sylvie Hancil & Ekkehard König (eds.), John Benjamins, *Grammaticalization Theory and Data*, 2014 (Sept), 293p (総頁), pp. 129–156 (担当頁). DOI: 10.1075/slcs.162. 雑誌論文⑧を掲載.
- ⑤ Nakagawa, Ken. (ed.), Eihōsha, *The Thirtieth Anniversary Publication of the Modern English Association*, 2014 (June), 454p (総頁), pp. 303–318 (担当頁). 雑誌論文⑨を掲載.

[産業財産権]

○出願状況 (計 件)

名称:
発明者:
権利者:

種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

○取得状況 (計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

[その他]

(1) 口頭発表予稿集論文

- ① Higashiizumi, Y. & J. Sawada. “Peripheries and constructionalization in Japanese and English.” *Abstracts*, pp. 28–29, *The 14th International Pragmatics Conference*, Antwerp, Belgium, 26-31 July 2015.
- ② Higashiizumi, Y. “Constructionalization of peripheral expressions in Japanese: From right periphery to left periphery.” *Abstracts*, pp. 210–211, *The 14th International Pragmatics Conference*, Antwerp, Belgium, 26-31 July 2015.
- ③ Higashiizumi, Y. “Development of discourse-pragmatic markers in Modern Japanese: A corpus-based study of *dar(o)* and *desho(o)*.” *Abstract Booklet*, pp. 26–27, *Discourse-Pragmatic Variation & Change 2*, Newcastle University, UK, 7–9 April 2014.

ホームページ等

柴崎礼士郎:

<http://gyoseki1.mind.meiji.ac.jp/mjuhpk/App?kyoinId=ymdygeyoggy>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

柴崎礼士郎 (SHIBASAKI REIJIROU)

明治大学・総合数理学部・准教授

研究者番号: 50412854

(2) 連携研究者

東泉裕子 (HIGASHIIZUMI YUKO)

東京学芸大学・留学生センター・非常勤講師

研究者番号: 30537337